

# 新建築

SHINKENCHIKU:2013

3



# HAUS DER HOFFNUNG 希望の家

名取市文化会館多目的ホール

設計 横総合計画事務所

施工 佐藤工業

所在地 宮城県名取市

HAUS DER HOFFNUNG NATORI PERFORMING ARTS CENTER MULTI-PURPOSE HALL

architects: MAKI AND ASSOCIATES



南側より見る。横総合計画事務所設計の名取市文化会館（本誌9809）「波の庭」に建てられた多目的ホール。ドイツのラインハルト・アンド・ゾンヤ・エルンスト財団による被災地支援で、子どもからお年寄りまで多くの市民が利用できる施設を寄贈した。市に建つ1,000戸余りの仮設住宅地のほぼ中央に位置する名取市文化会館の波の庭が、敷地として選定された。



エントリーポーチ。円形と三日月型のふたつの大屋根の組み合わせによって作り出された半屋外の空間。大屋根の間から光を落とし明るい空間。木デッキは庭へと繋がる。右手にエントランス。



エントランス。大屋根の下、相談室や倉庫に挟まれた半屋外の空間。エントランス脇の壁画は、名取市立関上小学の1年生によって共同制作された絵を10mm角のモザイクタイルによって再現した。東側の外壁にはドイツの子どもたちによる壁画もある。

#### 復興支援施設の空間コンセプト 「個と集合のあり方」

震災により甚大な被害を受けた地域には、元来日々生活の中での多様なコミュニティを支える街並みがあった。慣れ親しんだ土地から離れて避難生活を余儀なくされている方々が再び集い交流するための公共施設として、そして被災地のコミュニティの記憶を刻み継ぎながら復興の手助けとなる公共施設として、このようなあり方が考え得るのかという視点から、われわれは空間のシステムを検討することとした。はじめに所内でコンペを行い、アイデアを出し合った後、与志を募って設計を進めた。

それぞれの被災地で復興施設に求められる機能、規模、そしてそれを建設し得る敷地形状は異なる。そこで、自立した小さな空間ユニットを基本とし、それらが群となりまたは集合体となり、機能や規模の多様性に対応し得るシステムというコンセプトが考えられた。たとえば便所や倉庫、相談室などの小さな空間を必要とする場合はひとつの空間ユニットのみで建設し、児童館や集会所などの機能が求められる場合にはそれらの空間ユニットを手掛かりとして大きな空間をつくるという考え方である。段階的な建設によって状況や活動の変化に柔軟に対応させることも考え得る。人びとが集う場には個人が佇む小さな空間と大勢が集う大きな空間が共に必要であり、それらが互いに補完

しあうことによって地域独自の多様な活動を許容する親しみやすい空間が考えられる。そのような空間コンセプトに基づいて、罹災した方々が再び集いさまざまな活用できるコミュニティ施設として、名取市文化会館（設計：横総合計画事務所、本誌9809）の南の庭に合わせて計画されたのがこの施設であり、仮設の建築ではなく復興の中で象徴性を併せ持った恒久施設として、コミュニティの再生に寄与することをその最大の目的としている。

#### 「希望の家」について

「希望の家」は、小さな小屋群と、その上に架かる円形と三日月型のふたつの大屋根からなる木造平屋の建物である。高さ2.25m、約4m角の平面を持つ小屋は170mm角のヒノキ材の柱と170×180mmのスギ材の梁とで構成され、相談室や遊戯コーナー、畳コーナー、湯沸し室などの機能が収められている。これらの小屋は、その上の大屋根を支える手掛かりとなっており、建物全体の水平力を担っている。その壁にはモザイクタイルの3枚の壁画が設置されているが、これらはドイツの子どもたちと関上小学の子どもたちによるものである。ふたつの大屋根は共に2種類の三角形の木パネルの

組み合わせによって考えられている。4.5mと2.25mの二等辺三角形と一辺4.5mの正三角形の投影平面を持つ屋根パネルは、60×210mmのフレーム材と構造用合板からなり、ヤードで加工された後にクレーンによって設置され互いに連結された。小屋群と、それらを繋ぐ8の字型の梁、そして特徴的なV字型の柱によって支えられた屋根は、中央部で6.2mの高さを持つ。外周の軒高さを2.25mに抑えることにより、広がりを持ちながらも親しみやすいスケールの空間を作り出している。円形の屋根の下は内部化され、多目的室として集会やコンサート、演劇などの活動に利用されており、遊戯コーナーなどと一体的に使用することもできる。一方、三日月型の屋根の下は外部テラスとなっており、気候のよい季節には緑豊かな庭や文化会館の木デッキのテラスと共に、さまざまな活動に利用されることが期待されている。

内部空間と外部空間、開かれた空間と閉じられた空間、大きな空間と小さな空間、静かな空間と賑やかな空間、求心性のある空間と遠心性のある空間、それらがひとつの象徴性を持ったかたちにまとめられることにより、子どもからお年寄りまでが世代を超えて集い、永く愛着を持って利用していただけるような「家」となることが意図されている。

（長谷川龍友／横総合計画事務所）



多目的室。頂部で約6,200mmの天井高さのドーム状の大屋根で覆われた空間で、軒高さは2,840mm。左手遊戯コーナーの子ども用の家具は藤江和子アトリエのデザインによるもの。家具やピアノは建物と共に名取市へ寄贈された。床はナラ複層材フローリング t=15mm。



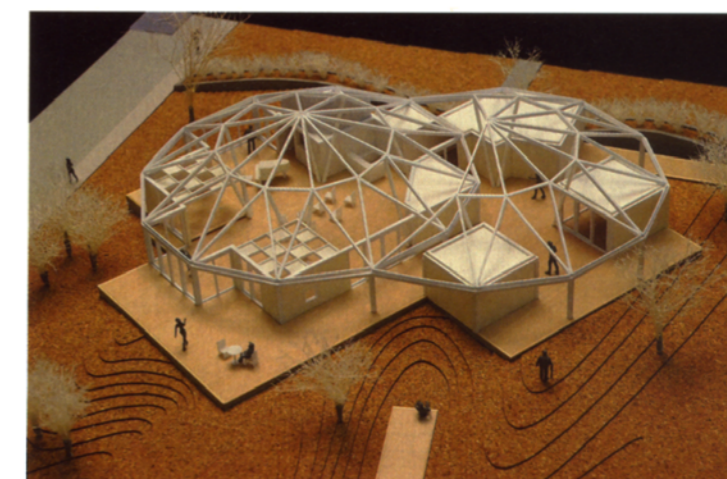
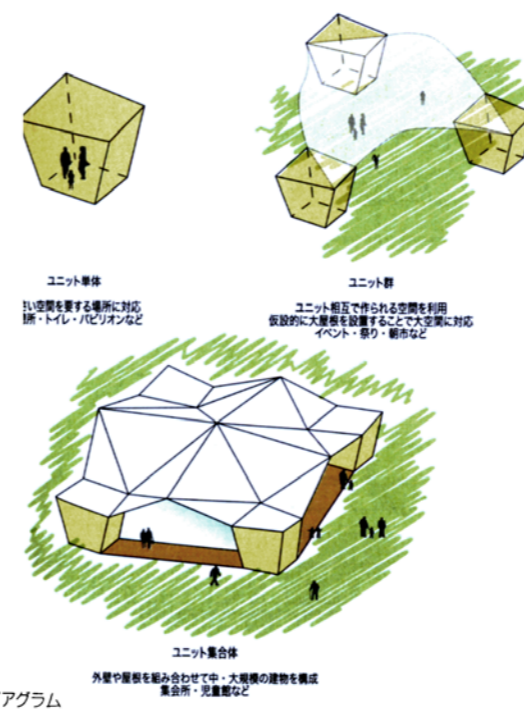
大屋根を支えるV字柱と水平力を受ける小屋。奥の小屋は畳コーナーとして障子で仕切ることができる。



工作教室の様子。地元の活動のみならず、他県からのボランティアグループによるワークショップなどを開催することも多い。



絵本の読み聞かせ会の様子。



大屋根の軸組みと8の字型の梁。その下の小屋群を表した模型写真。ユニット集合体のコンセプトが構造システムに表現されている。\*



名取市文化会館夜景。震災直後、大ホールホワイエの光を頼りに、約1,300人の被災者の方が避難してきた。



左：建物奇麗式。11月3日の名取市秋祭りの日、仮設住宅に避難されている方がたを招いてとり行われた。エルンスト財団、名取市長などの来賓によるテープカットの様子。右：震災後、多くの被災者の方が避難されている文化会館のホワイエ。

名取市文化会館の災害復旧から「希望の家」の完成へ  
東日本大震災の地震発生直後、名取市文化会館に問い合わせたところ、ガラスが1枚割れただけで怪我人もいないという報告に安堵していたが、その1時間後に津波が関上港を襲い、文化会館の近くまで浸水してきた。夜には文化会館の自家発電による明かりを頼りに1,300人余の方が避難してきたということだ。その後4月に文化会館で避難生活をされていた400人ほどの方が、仮設住宅や自宅に移られた後、6月に文化会館大ホールで犠牲者の方々の慰霊祭が行われた。文化会館の被害調査では、大ホールの天井が一部破損し、中ホールは客席の壁が一部落下していたが、全施設の構造には問題なく、壁仕上げに多くのクラックが見られた。復旧工事のための調査と設計を早急に始め工事も短期間で完了させ、2012年3月11日の合同慰霊祭を大ホールで行うことができた。「希望の家」は震災直後に、ドイツのラインハルト・アンド・ソニヤ・エルンスト財団から横に被災地への支援の相談があり、子どもからお年寄りのためのコミュニティ施設を名取市に寄贈することになったもので、文化会館周辺にある1,000戸余の仮設住宅地の中央に位置するこの敷地に計画し、設計をボランティアで引き受けた。2012年11月の秋祭りの日、名取市に寄贈され、仮設住宅のお年寄りや壁画を制作した小学生など市民の方をお迎えすることができた。震災から2年近く経ちこれからの本格的な復興において、この家が地域コミュニティ再生の一助になれば幸いである。(福永知義/横総合計画事務所)

設計 建築 横総合計画事務所  
構造 藤原幹雄/KAP  
設備 総合設備計画  
寄贈者 ラインハルト・アンド・ソニヤ・エルンスト財団  
施工 佐藤工業  
敷地面積 27,556.39m<sup>2</sup>  
建築面積 427.67m<sup>2</sup>  
延床面積 234.43m<sup>2</sup>  
階数 地上1階  
構造 木造  
工期 2012年5月~10月  
撮影 新建築社写真部(特記を除く)  
(データシート198頁)

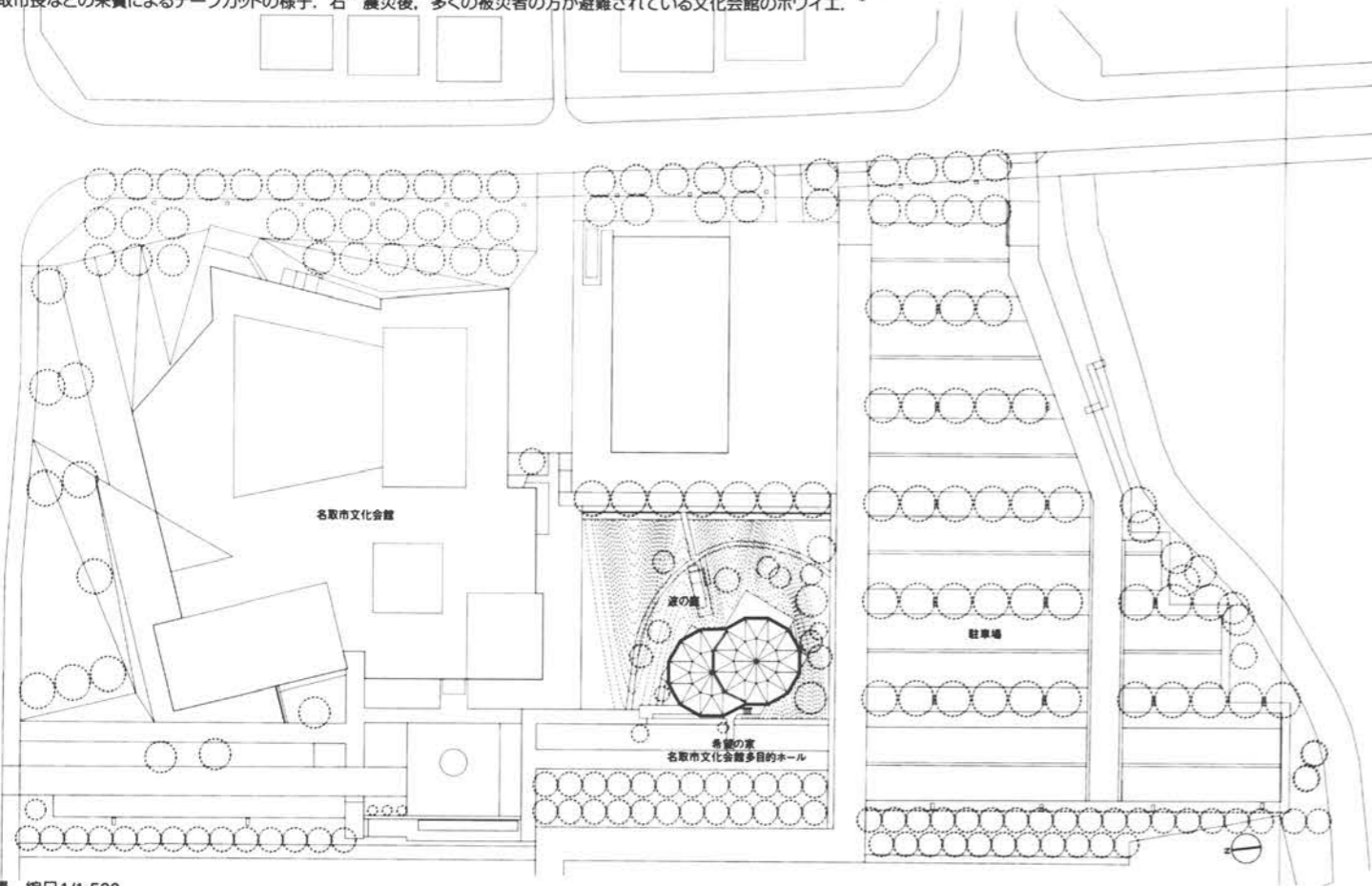


文化会館小ホールのホワイエから見る。2種類の三角形のパネルで構成された2枚の大屋根が重なる。手前のふたつの壁面はドイツの子どもたちによるもの。

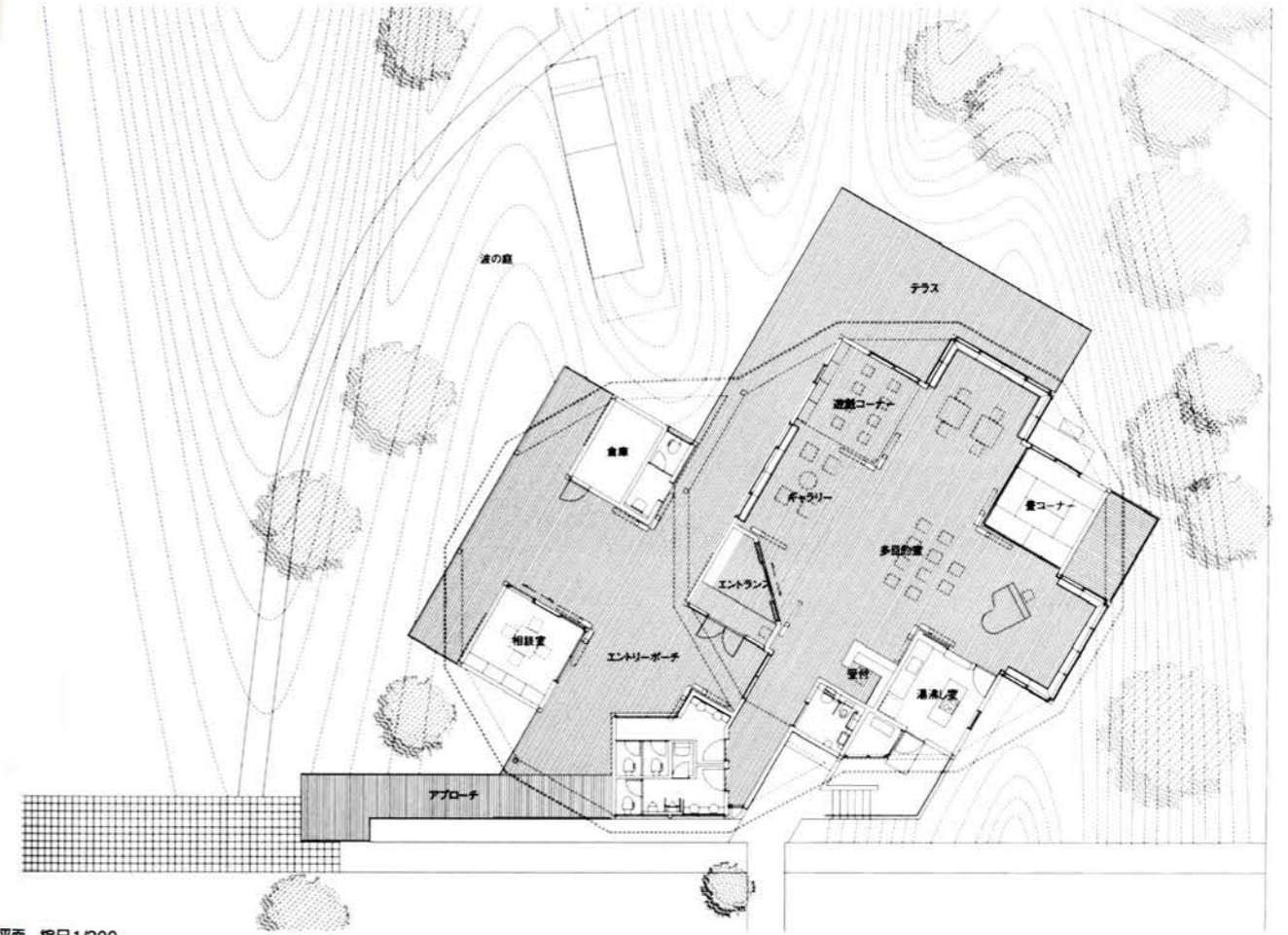
★動画は [新建築 Online](http://bit.ly/sk_online_movie) で  
[http://bit.ly/sk\\_online\\_movie](http://bit.ly/sk_online_movie)



南北断面 縮尺 1/300



配置 縮尺 1/1,500



平面 縮尺 1/300